

## 伊勢湾沿岸部における富士山信仰の諸相 —三重県伊勢市東豊浜町土路の富士講の富士参り—

松 田 香 代 子

### はじめに

平成 25 年 (2013) 6 月 22 日、富士山が世界文化遺産として登録され、日本一高い山は「登る」ことだけが目的ではなく、「信仰の対象と芸術の源泉」として日本文化に大きな影響を与え続けてきたことが認められ、改めて世間の関心が高まった。

実際に富士山を見たり登ったりしたことがない都人も、「駿河なる富士」を愛で、詩歌に詠み、絵画に描いたように、富士山は古くから日本人の心のよりどころであった。富士山への憧れは、眺望し遙拝することから、時代とともに山頂へ登拝することへと変化する。そこには、富士山が神仏の座す霊山であるという信仰を広めた宗教者が介在していた。日本の多くの山が山岳信仰の対象であり、歴史の中で多様な信仰形態をとってきたように、富士山にも信仰の諸相が現れ、地域によって様々な展開が見られた。

本稿では、東海地方でも伊勢湾沿岸部、とくに伊勢市東豊浜町土路における富士講の実態について報告し、当地方で隆盛を見た富士山信仰の民俗的背景について考察を試みたい。

### 1 土路の富士講

伊勢湾沿岸部には、富士講という富士山信仰の講集団が多く存在していた。毎年祭りをを行いながら、12 年に一度の申年に富士参

りを続けてきた講もあった。しかし、現在も同様の行事を続けている講はかなり減少し、平成 28 年 (2016) の申年に富士参りを行った講はわずかになっている。その貴重な講行事を伝承している村落の一つに、伊勢市東豊浜町土路がある。土路では、例年の富士講行事が、5 月 15 日・23 日・31 日の 3 回行われる。以下は、平成 27 年に行われた富士講の概略である。

3 回の行事はそれぞれ主催者が異なり、15 日は講元 (現町会長)、23 日と 31 日は富士講世話人が担当する。ここでは 5 月 23 日の講行事を報告する。場所は、土路町民会館と地域の人達がセンゲンサン (浅間さん) と呼ぶ大日堂前の広場である。町民会館の床の間には「富士浅間大神」の文字と浅間大神の絵姿が描かれた掛軸を掛け、そこに 12 個の赤飯のムスビと 12 本の扇子を供える。ムスビは富士山型の縦長の円錐形に固め、扇子には「ありがたや、ありがたやな」で始まる道行唄の詞章が印刷されている (写真 1)。また、大日堂前広場には中央に櫓が組まれ、大日堂脇に小山が築かれている。小山には、松の木が植えられ 7 段の階段が付けられている。この松は富士参りの年に植栽され、広場中央に築かれるオヤマの中央に立てるために、12 年間育成されるものである (写真 2)。

15 時、お籠もりと称して浅間さんの広場には年配の女性達が集まり、いくつかのグ

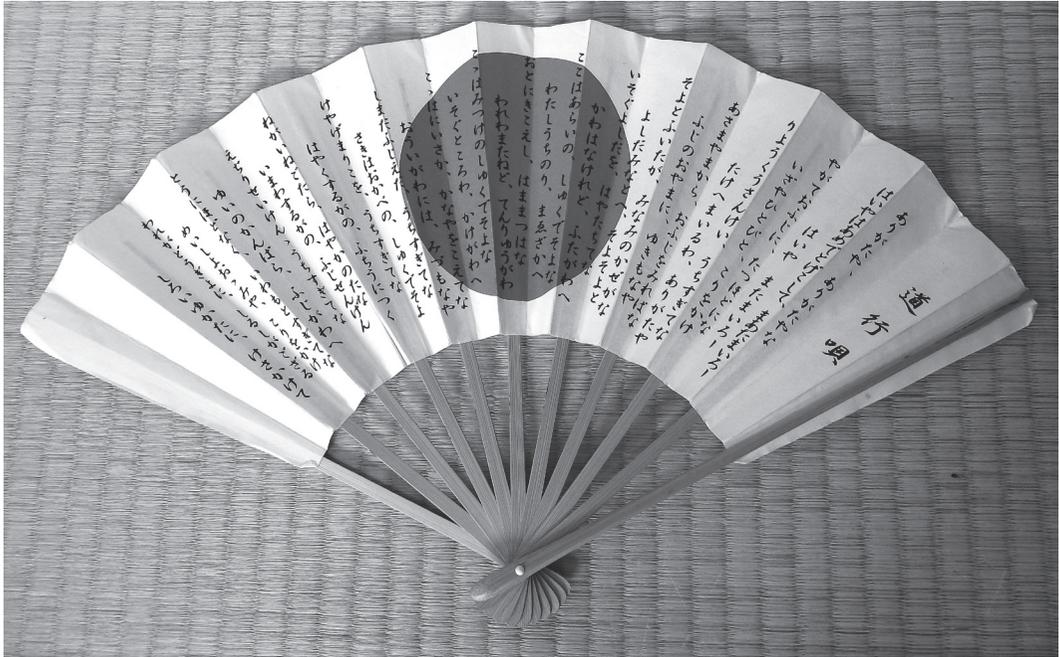


写真1 道行唄が刷られている扇子



写真2 大日堂脇の松

ループに分かれて莫産を敷いて座っている。16時、年配の男性達が土路内にある神宝山高蔵寺（臨済宗妙心寺花園派）での行事（寺



写真3 例年の富士講の踊り

講)を済ませて、浅間さんの広場に集まってくる。やがて、広場の檜の上で男性2人が踊り歌をうたい、その檜の周りで女性達が輪を作って踊る。踊り歌は28番まであり、ひとりが音頭取りで歌出しをし、もうひとりが合の手を入れて掛け合いでうたう。踊らずに莫産に座っている女性達も、合の手を入れている（写真3）。

16時半、踊り歌と踊りが終わる頃、町民会館から講元（町会長）を先頭に世話人が行列を組んでやってくる。講元は幣をつけた笹

を持ち、世話人は法螺貝と太鼓、赤飯のムスビ、御神酒、塩などの供物をそれぞれ持つ。浅間さんに到着すると、まず小山の松の木に筐を結わえ付ける。大日堂には2個のムスビと榊の葉の上に洗米をのせ、その上から御神酒を注ぎ、参拝する。同様に、小山（松の木）にもムスビ1個と洗米を供え、御神酒を注いでから参拝する（写真4）。



写真4 赤飯のムスビと洗米



写真5 世話人が赤飯のムスビを配る

この後、広場に集まっている人達に、世話人達から赤飯のムスビ、御神酒、漬け物、スルメイカなどが少しずつ配られ、皆で共食する（写真5）。また子ども達も三々五々集まってくるので、海老せんべいなどが配られる。

17時、大日堂前で講元2人が前列に、世話人5人が後列に並び、扇子を広げて「ありがたや～」で始まる道行唄を全員でうたう。世話人の後ろにも男性達が並び、唱和する。この後、講元と世話人は町民会館に引き上げ、

その外の人達も解散する。町民会館で夕食をとり、講員である子ども達（中学生）も弁当を取りに来る。なお、現在は弁当を受け取りにくる子どもは少ない。

20時、講元と世話人が町民会館の浅間大神の掛軸の前で道行唄をうたった後、町民会館を出発する。暗い道中、法螺貝を吹きながら浅間さんに向かい、大日堂前で再び道行唄をうたって、この日の行事は終了する。

## 2 土路の村落概観

土路が属する東豊浜町は、神宮式年遷宮のお白石持行事で知られる宮川が伊勢湾に注ぐ河口部左岸に位置している。東豊浜町は土路と西条にしじょうからなり、宮川が乱流して形成した三角州に立地する。土路の地名は、宮川の土砂がたまった泥に由来するといひ、西条は宮川水流の西筋道にあたることを意味しているといひ<sup>(1)</sup>。宮川がもたらす肥沃な土壌と豊かな伊勢湾の水産資源により、当町は半農半漁の生活を営んできた。その中でも土路は、海に面しているところから漁業中心の地区であり、海苔養殖、アサリ貝採取のほか、クルマエビ、アナゴ、カレイ、キス等の魚類を小型底曳網、刺し網で捕獲していた<sup>(2)</sup>。『伊勢市史』第八卷民俗編によれば、明治前期には土路西条村はナマコ、アオノリ、アオサノリを採取し、大正期の土路西条村の漁船数は157隻であったといひ<sup>(3)</sup>。水田に適さず畑作と漁業で暮らしを支えていたことが理解出来る。

土路の戸数は大正末期に300戸であったが、現在では180戸に減少した。東豊浜町では、土路・西条を区町会（あるいは町会）と称し、その自治組織の長を町会長と呼ぶ。土路の町会長は2名、そのもとに13の号組がある。このような行政上の区分とは別に、古くからミナンジョウ（南条）・サトナカ（里中）・ヤマナカ（山中）という3つの地域区分がある。漁港に近い浜側が里中と山中、陸側が南条である。



講行事は町会長・町会役員・富士講世話人、秋葉神社参拝と津島神社参拝は代参を旧町会長、町内一斉排水溝清掃は町内全員、交通安全アドバイザー2名、防火管理者1名、監事2名というように、町会役員が行事担当を兼務し、町会がすべてを取り仕切るシステムに



写真6 町会の行事と役職

なっている（写真6）。

しかし、伝統的な行事がこのように町会主導になったのは近年のことである。土路の富士講は講元制で、かつては南条と山中に各1名、計2名の講元がいた。里中地区は家の位置によってどちらか近い方の講元に属した。講元の任期は、富士参りで完結するため12年間務めることになり、富士登拝を経験した人があたる。毎年の富士講の行事は自宅で行い、最終年にあたる申年には富士登山を企画する。それら様々な経費をすべて負担するため、経済的に余裕がある家でなければ務まらなかった。

講元は12年で交代してきたが、しだいに講元を引き受ける家が減り、平成4年（1992）の富士参りでは講元が1人となってしまった。そのため、平成16年からは町会が講を引継ぎ、町会長2人が講元となっている。町会長2人の講元というのは、かつて講元が2人いたことに由来する。

この講元のもとに世話人と呼ばれる、行事の準備や講員のとりまとめ、行事の執行など諸般の実務にあたる人達がいる。講元1人に

つき、3人ずつで計6人いたが、町会が講を引き継いでからは世話人が5人となった。世話人は、講員の父親が頼まれることが多く、前任の世話人が見当を付けておき、町会長が正式に依頼する。

講は、12年ごとに再編成されるため、講員の募集は申年の富士参りが終わってから行っている。対象年齢は3歳から14歳までの男子で、12年後の富士参りの年には15歳から26歳までの青年になっている。講に加入すると、毎月千円ずつの積立をして旅費を貯め、12年後に富士登山を行う。かつて、講には土路の該当年齢の男子すべてが加入することになっており、幼年者は父親が代わって講に加入した。父親による加入は、現在も同様に行われている。

このように、富士講の構成員（講員）はいわゆる若者であり、かつての青年団の入団年齢15歳から脱退年齢25歳前後の年齢集団と重なっている。つまり、土路の若者がすべて富士講に入り富士登拝を目指すということは、富士山に登って初めて一人前の男として認められる、という通過儀礼をともなっているのである。この背景には、青年団組織の前段階にあったワカヤ（若屋）と呼ばれる若者宿の制度が関わっている。

東豊浜町では、若者が15歳になると若者宿に寝泊まりする習慣があった。これを鳥羽地方ではネヤ（寝屋）といい、当町ではワカヤという。ワカヤでは、神島や答志島（いずれも現鳥羽市）の寝屋制と同じように、地域の有力者などにワカヤオヤ（若屋親）を頼み、その家の一部屋で仲間と寝泊まりした。とくに漁村では、水夫の確保を目的として網元や船主がワカヤを務めたことから、そのような習慣が始まったと考えられている。土路では、ワカヤの主をトウサンあるいはアガミと呼び、出漁しないときにはワカヤで謡や木遣歌の練習をした。一緒にワカヤに寝泊まりした仲間をワカヤキョウダイ（若屋兄弟）と

いい、一生兄弟づきあいをする関係だったという。富士講の講元の宿では富士参りの道行唄と踊りの練習をしたといい、若屋制の延長に富士講の組織が成り立っていたことがわかる。

#### 4 申年の富士参り

平成28年(2016)は申年にあたり、土路の富士講の富士参りの年であった。この年の行事は例年とは異なり、土路の地元での行事と富士山に登る富士講の行事が同時進行で行われた。ここでは、地元土路での行事の概要を述べながら、聞き取りで判明した限りの富士山での富士講の様子を合わせて記述してみたい。

富士参りの年には、浅間さんすなわち大日堂の境内中央にオヤマを築くところから始まる。オヤマは、富士山に登る前の7月17日に築かれた。土は赤土を使い、土留めには芝を貼る。いずれも購入したものだが、かつては農家が育成した芝を使っていた。高さは2mほどだが、これもしだいに低くなったという。このオヤマの頂上に、前年まで大日堂脇に植えていた松を伐って植える。頂上周囲には割竹の柵で囲み、階段で頂上に上がる道を作る。松は高さ13m、オヤマの中に4mほど埋める。松の幹に「南無大日遍照如来 南無浅間菩薩 山頂参拜安全祈願」の塔婆を結わえ付ける(写真7)。また、この翌日に伊勢両宮(内宮・外宮)と朝熊山に代参する。

7月23日6時、登拝する講中が町民会館に集合し、オヤマ前で出発式を行う。ここで「富士蓬莱山由来」と土路富士講の祝詞を読み上げた後、講員全員で太鼓に合わせて道行唄と踊りを踊る。終わってから氏神高羽江神社へと向かい、お祓いの祈祷を受けていよいよ富士山へとバスで出発する。登拝者は講員21名、付き添い(世話人)5名、七合目で1名が合流したため計27名である。

17時00分、バスが富士山富士吉田口五合



写真7 お山の松の木の塔婆

目に到着する頃、土路では老人会や講中の家族がオヤマの広場へと集合する。17時50分、準備が整って登り始めるという連絡を受けてオヤマの周りで踊りが始まる。男性2人が歌出しをし、喉を潤しながら交代で行う。女性達はオヤマの周りで踊り、現地での休憩の知らせが入ると休憩をとる(写真8)。歌は28



写真8 富士参りの日の踊り

番まであり、最後までうたい終わるとまた1番に戻る。歌は扇子の両面にかいてある歌詞と同様で、囃子詞が途中に入るが、講中がうたっていた節回しとは異なる。

19時57分、講中が七合目トモエ館に到着。ここで仮眠を取るため、踊りも休憩して出発予定の23時前に集合することとし、一旦解散する。同報無線で町会長が集合を呼びかけることになる。23時45分、山小屋で準備中との連絡が入り、踊りもオヤマの広場に集合して待機する。町会長（講元）の挨拶の後、再び歌と踊りが始まる。0時45分、休憩。

何度かの休憩を繰り返すが、吉田口登山道が渋滞していてなかなか進まないとの連絡がある。4時10分再開、25分九合目通過。大混雑のため、頂上で御来光を拝むのをあきらめる。5時、日の出の時間に合わせて踊りを中断し、家族達は通りに入る。富士山できれいな御来光を拝めたという知らせを受け、土



写真9 土路でも御来光を拝む

路でも東方に向かい御来光を拝む（写真9）。ここで1時間の休憩のため、一時解散する。この後、一行は山頂まで登り、奥宮への参拝をすませて、16時15分に五合目に無事下山する。吉田口登山道は下山道も渋滞していたため、到着予定の9時を大幅に遅れ、その間、休憩を繰り返しながら地元土路でも踊り続け

られた。

## 5 富士講の変遷

一昨年の富士講行事、昨年の申年の富士参りについて概略を述べてきたが、前述したように、土路の富士講行事は講組織においても旧来のものが続いているわけではない。ここでは、文献資料と聞き取り調査で判明した富士講の変遷をたどってみたい。

土路の富士講が文献上確認できるのは、『浅間文書纂』に掲載された元禄2年（1689）6月吉日の春長坊の「駿州富士大宮本宮道者帳」の記述である<sup>5)</sup>。

### 勢州渡会郡

一大みなと	孫右衛門殿
一どろむら	同 断
一にし條	同 断
五月廿七日	

### メ四拾四人

この時は、宮川右岸の大湊と左岸の土路・西条の総勢44名がおそらく同一の先達か講元によって率いられ、5月27日に富士宮市大宮の春長坊に宿泊したと想像される。同じく近世ではあるが、土路村の宿泊記録が見えるのは幕末の嘉永元年（1848）である。これは富士宮市村山にあった修験の宿坊大鏡坊の道者帳で、6月23日に記載がある<sup>6)</sup>。

### 廿三日

#### 勢州渡会郡土路村

一壹貫貳百文	明松（松明）
一壹貫五百文	もち米
一三貫三百文	案内六人

と続き、防寒具の裕45に辻（辻之坊）7・池（池之坊）14と借りて34貫64文、下山の宿泊分として12貫203文、総計46貫676文であった。このほかに茶代として金2朱を支払っている。道者は先達が5名と73名の書上がある。この中には西条村の者も混じっていたようである。

このように、近世を通じても初期と末期で

は人数に変動があり、交通条件や経済条件の改善によってしだいに道者も増えていったと考えられる。それでもこの当時は代参という形で、村の代表者が富士登拝をしていた。

これが近代に入るとさらに増え続け、第二次大戦後の昭和31年(1956)には土路だけで80名くらい、昭和43年(1968)には137名だったという。それ以前の経験者がほとんどいないため、明治から昭和前期についての詳細は不明である。また、交通手段は昭和43年までは伊勢から電車を利用した。昭和31年には、御殿場駅で下りてバスで御殿場口の新太郎坊まで行き、そこから登り始め、頂上で御来光を拝んで、須走口へと下りた。この後、日光や東京タワーを見物して土路へと帰った。昭和43年には富士宮駅まで行き、そこからバスで白糸の滝を見物しながら富士吉田口五合目まで行った。下山は須走口へと下り、帰りは熱海から鬼怒川、東京タワーなどを見物して帰った。以降、登山は富士吉田口、下山は須走口と固定化する。ただし、下山後の観光は自由選択で、昭和55年には伊豆の土肥温泉に寄っていったという。

これ以前、戦争中の富士参りでは兵役者も登拝した。おそらく昭和19年の富士参りであろうか、地元在住者、兵役者、他出者の3班に分かれて別の日に登ったようである。また、それ以前の富士参りは、道行唄と同じように土路の湊から吉田湊へと船で行き、そこから陸路、後に東海道線で大宮口に出たという。

ところで、現在と大きく異なるのは、富士参りに行く前に垢離をかけたことである。例年の富士講でも垢離をかけたといい、場所は大日堂東側を流れていた川が広く池になった所で、着替えをする小屋もあった。代表者3、4人が裸になって池に入り、首まで浸かって底の泥を取り、最後は陸の見物人に向かってその泥を投げ付けて終了した。垢離をかくときには「南無浅間さん、オーイ」と唱えなが

ら行ったという。このような垢離取りは、各地の富士講に多く見られ、土路の富士講が5月23日のお籠もりに始まるのも、この日から1週間の精進潔斎とお籠もりがあったことの名残であろう。そして垢離行が終了する5月31日の翌日が6月1日であり、旧暦では富士山のお山開きとなる日である。

垢離をかくという意味では、現在は代参になってしまったが、富士参りに出発する前に伊勢両宮への参拝がある。この両宮参拝前に必ず寄ったのが二見浦で、伊勢参拝前の襦ぎはここで行うのが習わしであった。現在は、二見興玉神社で祓い清めを受けている。

昭和43年の富士参りでは次のようであった。5月23日の新講に、行李に御飯を詰めて浜(土路の浜か)へ行き、道中の踊りを踊った。富士参り当日は、まず二見浦に行き、外宮・内宮(両宮)に参拝、その後内宮前の宮前館で食事をした。宮前館の主人が先達で、御馳走を食べた後に道中踊りを踊った。その後、朝熊山へも参った。朝熊山からは富士山を眺めることができる。

さらに、オヤマを築く場所も変遷がある。当初は浜の宮が祀られている浜に松が植わっていて、その松の根元にオヤマを築いた。当時は、真っ直ぐ幹が伸びたオヤマに適した松が多く生えていていたが、今は松食い虫でほとんどなくなってしまったという。浜に砂山を築き、そこで浜降りをして御馳走を食べ、道中踊りを踊る。オヤマの松は富士浅間の依代であり、1週間の垢離をかねて精進潔斎をする。おそらく、これが土路の富士講行事の基本形であったのであろう。やがて、浜が後退し波除け堤防が築かれたことで、オヤマ築きを村の辻へと移動した。それが、オテンノウサンと呼ばれている津島神社前の広場である。しかし、ここはバスの終点にもなっている交通の要所でもある。1週間とはいえ、ここにオヤマがあるのは都合が悪く、やがて大日如来(浅間さん)が祀られている大日堂前

の広場へと移動した。ここにオヤマを築くようになったのは、平成4年の富士参りの年からであるという。

## 6 道行歌と踊りの原型

最後に、富士講行事の中心となっている歌と踊りについて考察したい。まず、この富士参りの歌については、荻野裕子氏の研究蓄積があり、氏によって鳥羽・伊勢・志摩地方の広範囲に分布していることが明らかにされた<sup>(7)</sup>。そして、この系譜の歌は富士参詣の道中にある名所や名物を歌い込む道中歌であることを解いている。本稿でも土路の富士講が所持する扇子に印刷された「道行唄」を後掲したが、前述したように富士参りに出発する前の垢離かきから両宮参拝、朝熊山参詣まで律儀に歌い込んでいる。

土路の富士講では、地元で女性達が輪踊りをする時にうたわれる歌をミチユキウタ（道行歌）、講中の青年達が社寺や先達の家、あるいは富士山頂で太鼓に合わせてうたって踊るものをドウコウカ（道行歌）と呼び分けている。しかし、どちらも漢字を当てれば「道行歌」であり、囃子詞が入らなければ歌詞はほとんど同じものである。荻野氏が指摘するように、おそらく富士参りの講中がうたっているのは「道中歌」で、道中踊りを踊っているのであろう。ところが、歌詞にこだわらなければ、双方の歌は節回しも踊りもまったく異なる曲として聞こえるのである。

写真3をもう一度見ていただきたい。櫓の上に音頭出しが立ち、その周囲で女性達が手踊りをしている景色は、客観的に見ても盆踊の風情である。違和感があるとすれば、浴衣ではなく普段着で、しかも昼間踊っていることくらいである。これが、富士参りの年の写真8になると夜間になる。会場には四方から提灯が掲げられて灯が入り、盆踊そのものになっている。このオヤマは本来浜に作られ、そこで人々が富士登拝の無事を祈って一晩中

踊っていたのである。

伊勢志摩地方は、盆行事が多様で盛んな地域として有名である。志摩市大王町波切では、お盆に浜に作られた櫓の周りを、新亡の家の者が傘ブクを持ってぐるぐると回る大念仏が行われる。このような先祖祭りの盛んな地方での富士講行事は、歌や踊りの所作に少なからず盆踊の影響を受けているのではないだろうか。土路の女性達が使っている歌本には、2頁目に次のような文面が記されている。

### 踊り方

三歩進んで、二歩下がり、  
輪の中心に向きを変え、  
右足あげ、  
そのつど、拍手二回、  
進行方向にむかって、  
手でお山の形を一回、  
(手は上から下へとかぶせる)

明らかに盆踊とは異なるように踊ることが意識されている。つまり、盆踊が原型にあり、そのバリエーションとして作られた動きだといえる。そのため、隣の西条地区では、盆踊のように手や足を右や左にくねらさずに「手のひらを上に向けて、追いつけるように踊る。足もしゃんしゃんあげなくてはいかん」といい、オヤマ（富士山）に登っている人達を思っただけ踊ることを強調している<sup>(8)</sup>。

土路の踊り歌にある合の手囃子詞「ソリャセー ソリャセー」「ショウガイノーヤレノーオ」と、音頭出しの最初の歌い出し「ハア エイ エイ エイ エーイイ」は、一番毎に繰り返して、踊りに弾みをつけている。これも盆踊り歌のうちの「しょんがい節」と呼ばれている口説調のものだといえる<sup>(9)</sup>。さらに、鳥羽市神島の盆踊り歌には「足も軽かれお山も良かれ、参る道者衆は皆よかれ」と歌い出すものがあり、山上講（大峰講）や伊勢講もからんで、様々に盆踊にうたわれてい

たことがわかる<sup>(10)</sup>。

### おわりに

本稿では、伊勢市東豊浜町土路の富士講を取り上げ、伊勢湾沿岸部の富士山信仰の一例として考察してみた。富士山信仰の広まりは、伊勢湾沿岸部だけではなく、東海地方・近畿地方、さらにその西方にも及んでいる。この方面での富士山信仰の調査研究はまだ緒につ

いたばかりであり、軽々に結論を述べることは出来ない。しかし、富士山信仰が浸透し定着していく過程には、おそらくそれ以前からある信仰や民俗の祖型があったからだと思像している。今後、本稿で解明できなかった問題点も含め、さらに範囲を広げて各事例の分析を試みたい。その上で、富士山信仰の実態や歴史的な経緯も明らかにしていきたい。

〈参考資料〉

### 道行唄の詞章

(日の丸の白扇の上に印刷されたもの)

※ ( ) 内は筆者の加筆

### 道行唄

ありがたや、ありがたやな  
 はいやはあめでとげこ (下向) して、まあたまいろー  
                   はいや またまいろー  
 やがておふじ (富士) に、たつほどにな  
                   いざやひとびと、こり (垢離) をかけ  
 りようくう (両宮) さんけい (参詣)、うちすぎてな  
                   たけ (岳) へまいるわ、ありがたや  
 あさまやま (朝熊山) から、おふじ (富士) をみればな  
                   ふじ (富士) のおやまに、ゆき (雪) もなや  
 そよとふいたが、みなみ (南) のかぜ (風) がな  
                   よしだみなと (吉田湊) へ、そよそよと  
 いそぐよしだを、はやたちてな  
                   かわ (川) はなけれど、ふたがわ (二川) へ  
 ここはあらい (新居) の、しゆく (宿) でそよな  
                   わたし (渡し) うちのり、まゑざか (舞阪) へ  
 おとにこけえし、はままつ (浜松) はな  
                   われわまたねど、てんりゆうがわ (天竜川)  
 こゝはみつけ (見付) のしゆく (宿) でそよな、  
                   いそぐところわ、かけがわ (掛川) へ  
 こゝはにいさか、かなや (金谷) をこえてな  
                   おういがわ (大井川) には、みづ (水) もなや  
 しまだ (島田) ふじえだ (藤枝)、うちすぎてな  
                   さきはおかべ (岡部) の、しゆく (宿) でそよ

けやげ（蹴上）まりこ（丸子）を、うちすぎてな  
 はやくするが（駿河）の、ふちう（府中）につく  
 ねがいねごたら、はやかのたな  
 いまわすぐらの、ふじせんげん（富士浅間）  
 えぢり（江尻）せいけん（清見）、うちすぎてな  
 ゆい（由比）のかんばら（蒲原）、ふじがわ（富士川）へ  
 とうにほどなく、いわもと（岩本）すぎてな  
 めいしよ（名所）おゝみや（大宮）、こり（垢離）をかけ  
 われがどうぎよに、しるしがござる  
 しろいゆかた（浴衣）に、けさ（袈裟）かけて  
 ねがいねごたら、ひよりもかのたな  
 おむろ（小室）すまいも、すぐとうり  
 はちじょう（八葉）まわらぬ、そのうちにな  
 おがみもうそや、ごらいこう（御来光）  
 ふじ（富士）のおやま（山）で、ひるねをしたらな  
 はちじょうまわり（八葉回り）た、ゆめをみた  
 はちじょうまわりて、すな（砂）をり、おりてな  
 おりたこゝろわ、ありがたや  
 にしがくもれば、あめとなるな  
 ひがしひでりで、やまよかれ  
 のでもやまでも、かねがふるな  
 うちはしらげの、よね（米）がふる  
 よしだ（吉田）とうればにかい（二階）からまねくな  
 しかもかの子（鹿の子）の、ふりそで（振り袖）で  
 そよとふいたが、ならいのかぜがな  
 おいせみなと（伊勢湊）ゑ、そよそよと  
 おやまよいとの、ふねがきたな  
 ばさんでてみよ、まごつれて  
 おまいりよかた、げこよかたな  
 とまりどまりの、やどよかた  
 せんのおやまも、よかたなそなな  
 こんどのおやまもなほよかた  
 おふじみやげに、なにもろたな  
 しやくし（杓子）もろたら、ふだ（札）そえて  
 いわいめでたの、わかまつさまわな  
 えだもさかえる、はもしげる

平成十七年酉歳

土路富士講

## 〈註〉

- 1 北村とよ『我流の豊浜巷談』私家版、2012年
- 2 1に同じ。
- 3 『伊勢市史』第八巻民俗編、伊勢市、2009年
- 4 三重県神社庁強化委員会インターネットサイトより
- 5 浅間神社社務所編『浅間文書纂』名著刊行会、1973年
- 6 富士宮市教育委員会編『村山浅間神社調査報告書』富士宮市教育委員会、2005年
- 7 荻野裕子「富士参りの歌—伊勢志摩からの富士参詣—」『近世民衆宗教と旅』法蔵館、2010年、同「『めざせ富士山頂』の歌—伊勢志摩の富士参りの歌」『人はなぜ富士山頂を目指すのか』しずおか文化新書1、静岡県文化財団、2011年ほか
- 8 3に同じ。
- 9 『三重県の民謡』三重県教育委員会、1990年
- 10 『鳥羽市史』下、鳥羽市、1991年

## 〈謝辞〉

本稿では土路富士講の講元、世話人ほか多くの方々から聞き取りや資料の提供を受けました。また、鳥羽郷土史会員の江崎満氏、奈良教育大学非常勤講師の荻野裕子氏、静岡県富士山世界遺産センター准教授の大高康正氏にも多くの御教示を賜りました。ここに改めて御礼申し上げます。